

# 県内の産業

(その26)

— 準戦時における経済の推移 —

昭和6年から12年にかけての県内の産業は前述のとおりであります。次に県内生産活動を当時の工業統計からみてみよう。

昭和6年の県内の工場数は818工場、従業者数12,233人、生産額31,498千円であり、この産業別の詳細は資料の関係で不明でありますので、国内の昭和17/昭和6年対比と比較をみるために昭和17年/昭和7年の数値で両者をみてみよう。しかし、昭和7年は6年にくらべ786工場で32工場の減少、従業者は11,609人で1,624人の減少、生産額においては29,490千円で2,008千円の減少と生産活動の低下があり、この減少傾向は8年まで続き、8年下期に至り昭和6年の水準に達したのであります。こうした県内の景気動向に一応留意しててみましょう。

まず国における事業所の増加をみますと、昭和6年の6万4千工場が12年こは10万5千工場と64.9%の増加率をみせたのであります。これは従業者数、生産額のそれぞれの増加率77.5%、216.4名に比べますと少ないのであります。工場数の増加率についてみるとこれまでのどの時期よりもはるかに多かつたのであります。と同時にこの期間の事業所の動きの背後に企業の集中、独占化が進められたという大きな特色とされております。

第1表 産業別工場数

産業別	工場数		工場構成比		工場数増加指数 昭和6年 =100.0
	昭6年	昭12年	昭6年	昭12年	
合計	63,938	105,349	100.0	100.0	164.9
食料品	12,567	16,518	19.7	15.7	131.4
紡織	23,306	33,192	36.5	31.5	142.4
製材木製品	5,404	10,191	8.5	9.7	186.8
印刷製本	2,948	3,857	4.6	3.7	130.8
窯業・土石	3,495	5,542	5.5	5.3	158.6
化学	3,468	5,747	5.4	5.5	165.7
金属	4,161	10,091	6.5	9.6	242.5
機械器具	5,784	14,497	9.0	13.8	250.6
その他	2,805	5,714	4.4	5.4	203.7

第1表から紡織工業が依然として最大の部門であります。事業所数、従業者数、生産額の増加率が少ないためこの期間に急速に比重を低下させ、従業者構成比をみると昭和12年では36.8%と大きく50%を割り、生産額でも30%を割つたのであります。次いで食料品工業では、工場数で3.1%、

第2表 産業別従業者数

産業別	従業者数		工場構成比		工場数増加指数 昭6昭12 (=100)
	昭6	昭12	昭6	昭12	
合計	1,780,000	3,158,754	100.0	100.0	177.5
食料品	150,155	205,589	8.4	6.5	136.9
紡織	979,415	1,161,596	55.0	36.8	118.6
製材木製品	64,615	120,679	3.6	3.8	186.8
印刷製本	59,818	74,304	3.4	2.4	124.2
窯業・土石	66,435	132,730	3.7	4.2	199.8
化学	141,557	354,672	8.5	11.2	250.6
金属	99,198	349,348	5.6	11.1	352.2
機械器具	177,072	661,743	9.9	20.9	373.7
その他	41,735	98,093	2.3	3.1	235.0

従業者数で37%の増加であります。その増加率も窯業、土石工業に次いで低位であつたのであります。この期間に企業の生産集中度の著しかつたのも当該産業であり、とくに製糖、製粉、ビール産業にそれが著しかつたが、他産業にくらべ圧倒的に零細企業の多いの特色でありました。また、窯業、土石部門は上述2産業にくらべ重化学工業部門について活発な生産がみられたのであります。これは昭和6年以降の陶磁器類の輸出の増大、セメント工業の需要増など当時の大隆進出を計つていた、わが国外交政策に負うところが大きであつたのであります。

これらの産業の増加率にくら

べ、機械器具工業のこの期間の拡大は極めて著しく、6年間に工場数は2.5倍、従業者数は3.7倍、生産額は5.1倍となり、今までにない大きな伸長がみられたのであります。これは昭和6年の満州事変勃発、昭和12年7月の中日戦争等当時の国内経済は着々準戦時体制がとられ、それにともなう軍事費支出の増額がみられ、その結果企業間において産業活動が活発化しこの部門の市場を拡大し、機械工業すべての部門の発展をみたのであります。

前述の国内生産活動にくらべ県内の生産活動をみると県内工場のなかで最もウエイトの高い産業は食料品工業であり、363工場で46.2%を占め、

第4表 産業別県内工場数

産業別	工場数		工場構成比		工場数増加指数 昭12 (昭7=100)
	昭7	昭12	昭7	昭12	
合計	786	958	100.0	100.0	121.9
食料品	363	391	46.2	40.8	107.7
紡織	117	119	14.9	12.4	101.7
製材木製品	120	173	15.3	18.1	144.2
印刷製本	20	23	2.5	2.4	115.0
窯業・土石	34	40	4.3	4.2	117.6
化学	15	74	1.9	7.7	493.3
金属	11	6	1.4	0.6	54.5
機械器具	29	51	3.7	5.3	175.9
その他	77	81	10.0	8.5	105.2

第3表 産業別生産額

産業別	生産額(100万円)		工場構成比		工場数増加指数 昭12 (昭6=100)
	昭6	昭12	昭6	昭12	
合計	5,159.8	16,327.8	100.0	100.0	316.4
食料品	837.8	1,474.1	16.2	9.0	175.9
紡織	2,003.5	4,459.7	38.8	27.3	222.6
製材木製品	149.6	383.8	2.9	2.4	256.6
印刷製本	176.7	273.2	3.4	1.7	154.6
窯業・土石	155.5	443.9	3.0	2.7	285.5
化学	821.8	2,900.9	15.9	17.8	353.0
金属	479.0	3,727.5	9.3	22.8	778.2
機械器具	456.3	2,636.0	8.8	14.3	511.9
その他	79.9	32.8	1.5	2.0	411.1

次いで紡織工業の117工場で14.9%、印刷製本工業が2.5%の順となり、工場の分布をみてもこれら軽工業部門で実に93.2%を占めているのであります。これが昭和12年には軽工業部門85.0%、重化学工業部門15%と工場数では昭和7年にくらべ重化学工業部門で8.2ポイントの増加をみたのであります。これに対し生産額では昭和6年の重化学工業部門は全生産額の33.7%、昭和12年は69.9%と実に36.2ポイントの増加がみられたのであります。したがって、従業者数も昭和12年は24,966人で、昭和6年の11,609人にくらべ13,400人の増加で2倍以上の拡大がみられたのであります。

第5表 工場数、従業者数、生産額の推移

	工場数		従業者数		生産額		構成比					
	昭7	昭12	昭7	昭12	昭7	昭12	工場数		従業者数		生産額	
							昭7	昭12	昭1	昭12	昭7	昭12
県計	786	958	人	人	千円	千円	%	%	%	%	%	%
軽工業部門	731	814	9,483	11,082	19,564	35,953	93.2	85.0	81.7	44.4	66.3	31.1
重化学工業所	55	144	2,126	20,952	9,926	79,823	6.8	15.0	18.3	55.6	33.7	68.9

## 第9回茨城県統計大会開催さる

第9回茨城県統計大会は茨城県及び茨城県統計協会主催で、10月11日、水戸市千波町県民文化センターに於いて盛大に開催された。

会場の小ホール前には、午前8時半特設受付場が作られ、三三五五集まる 県下各市町村の統計マンに、係員一同てんでこ舞の応対が始まった。大会は午前9時半、統計課長の開会のあいさつで始まり、知事代理の青鹿副知事が、県の発展の礎となるのは、その重要度からみて統計をおいて外にない、日頃大変御勞されている皆様の力に期待するものが大きいと力強くあいさつし、ただちに表彰式に進んだ。

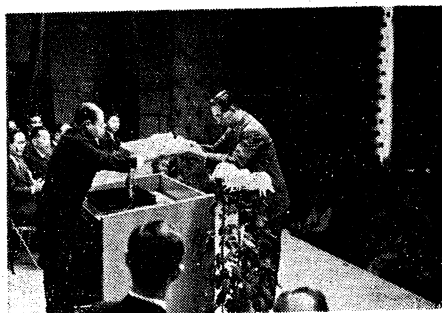
ぎっしりつまつた会場は、年一度の大会にふさわしく熱気がこもり、長年にわたつて、県統計界の発展に陰ながらつきた方々が次々と表彰されると、大会の雰囲気は高まつた。



<副知事あいさつ>

やがて、第18回茨城県統計グラフコンクール入選者の表彰になつて、日立市助川小学校の福田佐栄子さんの小さな体があらわれ、その愛らしい動作に、賞状をわたす青鹿副知事をはじめ来賓各位がニコニコすると、会場はそれまでの緊張がほぐれてなごやかになつた。

今年度の統計グラフコンクールでは、毎年上位をしめていた結城の中学校にかわつて旭中学校の台頭が特筆されるが、学校賞を受賞する校長先生の顔にも喜びの生気があふれていた。



<学校賞の表彰>

来賓祝辞のあと祝電が披露され、受彰者を代表して、水戸市の調査員渡辺公策氏、旭中学の田崎朝子さんの謝辞があつた。

次に、「われわれは、の郷土茨城は、いま、めざましい躍進をしようとしている。統計がこの躍進の指針として各方面に広く利用されていることは、われわれ統計関係者にとって大きな誇りであり喜びであるとともに責任の重大さを痛感する。



<統計グラフコンクール入選者表彰>

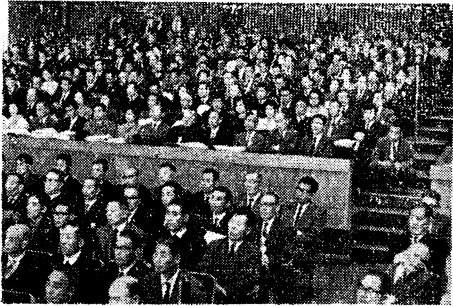
統計法施行20周年記念第9回茨城県統計大会にあたり、さらに決意をあらたにしてこの重責を果すため努力することを誓い、ここにつぎのとおり決議する。

1. われわれは、統計に寄せる社会の要請と期待にこたえるため、いつそ統計知識の研さんにつとめる。

1. われわれは正確な統計を迅速に作成し統計

利用の向上につとめる。

1. われわれは、統計を通じ郷土の発展と県民相互の理解に貢献し、統計人として誇りを高めるようつとめる。」以上の宣言文を桂村加藤木総務



<満員の会場>

課長が高らかに読み上げ、ついで万才三唱があつて、意義深い大会の終了となつた。その後、アトラクションの舞踊を見たり、会場前に展示されたグラフコンクールの入選作品に見入つたり、参加者の胸にこもつた大会の熱気は少しづつ散つていった。



<グラフ展>

## 全 国 統 計 大 会 記

10月25日広島市で開催

第18回全国統計大会は、秋晴れにめぐまれた10月25日、全国統計協会連合会広島県、広島市、広島県統計協会主催、山口、岡山、島根、鳥取各県後援のもとに、中央各省庁その他関係各団体の協賛をえて、広島市公会堂に、全国から集まつた約2千人の統計マンが参集して、はなやかに開催された。

大会場にあてられた公会堂は、広島市の中心部にあつて、全世界に知られた原爆受難の爆心地を見事に整地して作られて平和公園の中にある。原爆の恐ろしさと、まちがった原子力の使用がいかに非人間的なものであるかを訴える原爆記念館、原爆資料館とならんで、平和を祈念する市民のいこいの場らしく、清楚な建物である。

大会は、午前8時半の受付と同時に、封切られた。9時半、主催者の



<大会場広島市公会堂>

開会のあいさつのあと、ただちに、表彰式に移つ

た。長い間統計マンとして統計の発展に寄与した功績をたたえられる人、あるいは、研究、調査の企画、改善に努力し社会に有益な資料を提出して多くの成果をあげた人等、それぞれ各分野で皆エキスパートとして統計の前進に功績のあつた人々に対して、統計マンとして最高の榮譽である大内賞をはじめ、中央各省庁、全国統計協会連合会からの表彰が、約2千人に及ぶ日本の統計マンの万来の拍手のうちに、おごそかに行なわれた。

本県関係では、すでに本誌で報じたが、境町役場の佐野貞雄氏、県統計課の軍司利兵衛氏の二氏が行政管理庁長官賞を、県統計課大録義行氏が全統連表彰をそれぞれ授与された。

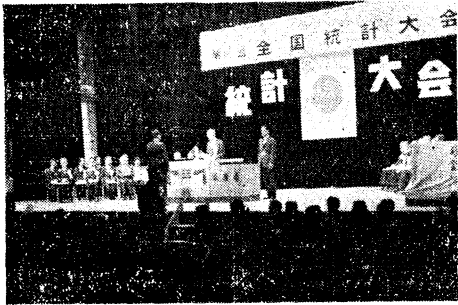
また、茨城県に対して、法人企業投資予測調査、毎月勤労統計調査、教育統計調査の成績をみとめられ、それぞれ、企画庁長官、労働大臣、文部大臣から表彰状が授与された。

表彰式の最後をかざつたのは、毎年、統計教育の普及向上を目的として行なわれている統計グラフコンクールの入選者表彰であつた。統計グラフは年々質の向上が著るしく、とくに、第1部、第2部の小、中学生の作品は、レベルが高くなつてい

され、多数の人々が感心して見入っていた。

本県では、旭中学校の田崎朝子さんが第2部で7席 山川小学校の黒須篤美さん、田村早苗さんの作品が9席に入選した。

表彰の終つたあと祝辞や祝電があつて、受賞者を代表して大内賞を受賞した大島健蔵氏、香川県の小学生統計グラフコンクール特選の村北昌代さんから感激にみちた謝辞があつた。

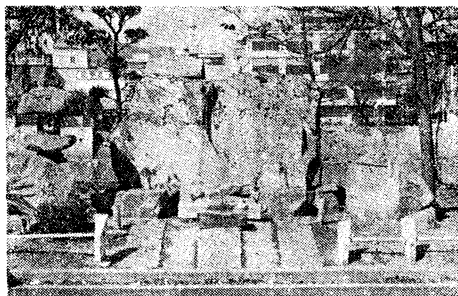


<大会々場>

次に、議事に入り、「地方統計の機械化と地方分庁の合理的編成をすすめられたい」との議題を岡山県統計課長が説明し、議題審議委員を8名指名付託して、午後3時からの審議委員長の経過報告のち採決に入り、満場一致で採択された。

次いで、研究発表に移り、四国ブロック、九州ブロックの代表から、高知市開発課西本雅彦氏の「調査資料の台帳的保管と誤差のチェックについて」福岡市統計課仲原剛氏の「福岡市の都市圏人口について」と題してそれぞれ研究発表があり、統計の改善、普及向上、利用がまだ必要であると論じた。ここで午前の部を終了。

昼食休憩の時間を利用して会場付近を散歩した。爆心地とはいへ、被災のあととは全くみられない平和な公園で、三方を川に囲まれた水の都の中心部のたたずまいであつた。それでも、川岸に建

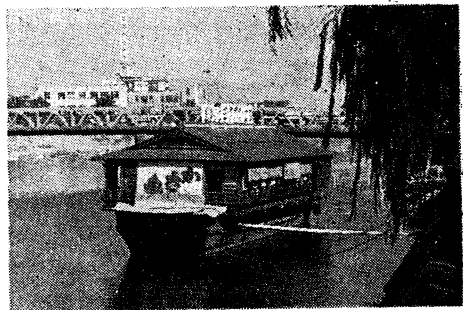


<義勇隊の碑>

てられた「義勇隊の碑」等の慰霊碑にきざまれた中学生、女学生の名前の1人1人が、静かに平和な世界を祈願し、訪ずれる人に私たちの受難をふたたびくりかえすことのないよう呼びかけているようであつた。

会場の隣の原爆記念館には、原爆の恐ろしさを物語るかずかずが展示され、訪ずれる人の絶え間がなかつた。

午後は、中国新聞社編集局長、森脇幸次氏の司会で、シンポジウムが行なわれた。内藤勝氏、北林琢男氏、伊大知良太郎氏、斉藤金一郎氏、の意見に対する質問の形で進行をすすめ、活発な応答があつたが、意見をのべた諾氏との間に若干のくいちがいが感じられた。しかし、地方統計の、重要度の著るしい高まりと、充実が強く要望されることで意志の統一をみ、いちおうの成果をあげたことは有意義なシンポジウムであつたといえよう。



<かき船>

なお、次回開催地である岐阜県企画部長の歓迎のあいさつがあり、つづいて、大会の最後をかざるにふさわしく、東京大学名誉教授有沢広己氏の「日本経済の明暗」と題して記念講演があつた。日本経済の二重構造を鋭くついた氏の見解は聞く人々に大きな感銘を与え有意義であつた。

定刻4時、有沢広己氏の音頭で万才三唱、大会は、主催者の洗練された運営によつて無事盛會のうちを終了した。

夕闇せまる広島は、全国統計大会の成功をことほぐかのように広島の川々の水面にしつとりと映つていた。有名な「かき」を食べさせる船が印象的に水面の美しさを一つそう引きたてていた。

来年の岐阜大会においても、日本統計の前進が確認できると期待して筆をおく。